

一晩で出戻り、誰も怒らなかつた

いま No.648
子どもたちは
お坊さん高校生②

高野山高校への転入を間近に控えた高校2年の夏、平幡航正君(18)は住み込むはずの寺を一晩で逃げ出した。生活費として親にもらったお金を手に、目指

すは約700km離れた故郷の千葉県銚子市。一人旅は初めてだが、無我夢中だった。「早く行かなきゃ捕まっちゃう」最低でも8時間の道のりだ。南海電車、地下鉄、新幹線……。電車一本を乗り継ぎ、その日の夜、銚子駅に着いた。最初

は親戚の家へ逃げ込んだが、結局は実家へ。父の照正さんは言い聞かせた。「3日いられば、3週間

いられる。3週間いられば、

3カ月いられる。まず3日我慢してみなさい」高野山以外に居場所はない。観念して翌日、父と高野山に戻

った。敢しく怒られると覚悟していたが、寺の人からかけられた言葉は「今度帰るときは言っ

てな」。それだけだった。再び、お勤めで始まる毎日が



平幡航正君(右)と起正君(左)が、高野山で後膳の片付けをする様子。お膳を片付けるお坊さん(右)と高野山(左)。

ひときり大きな声でお経を唱えていると、住職がほめてくれた。「自分を愛して」と思えた。父の言葉にあった「3日間の我慢」を乗り越えた。朝のお勤めが終わると、宿坊の宿泊者への朝食の配膳作業が

待っている。朝食の片づけ、掃除、夕食の配膳、布団の用意……。夏場には宿泊者が30人ほどになる日もあるが、3人の修行僧で大半の世話をする。すべて高野山では修行の一環だ。寺に戻って10日ほど過ぎたこ

ろ、高野山高校へ初めて通う日がやってきた。宗教科主任の富田向真教諭(18)は、当時の平幡君の目の鋭さが印象に残っている。確かに皆の前に立ったときは緊張していた。でも、見回して、ほっとした。宗教科の同級生は全部で6人。「これなら仲良くなれそうだな」と思った。勉強はあまり得意でなかったが、華道やご詠歌など、宗教科の授業は実技も多く、おもしろかった。ただ、ずっと気になっていたことがあった。

「仏様って本当にいるんだろうか」(二橋麻子)

仏様っているのか 答えはまだ

いま No.649
子どもたちは
お坊さん高校生③

高野山高校に来る前、平幡航正君(18)は「なぜか、いつもイライラしていた」と振り返る。祖父は平安時代からの歴史を持つ寺の住職で、父は副住

職。母は幼稚園園長を務め、跡取りに期待されている文武両道の兄。周囲から当然のように自分も仏道に、と思われる中で、「どうしてもお坊さんになりたくなかった」。

口に出せない疑問もあった。「仏様って本当にいるのだからか」弘法大師以来の寺々と、わずかな数の商店が立ち並ぶだけの高野山。時間を超越したこの町で、「他人の飯」を食い、般若

心経をお寺や学校で、少なくとも10回は唱える毎日。数カ月たつと、早く一人前の僧侶になつて、両親を手伝いたいと思つようになつた。「環境に自分の気持ち加われば、人は変われる」。父の照正さんは、帰省した息子に「まなざしが柔らかくなつたこと」を驚かされた。

今は、草むしりを進んでするよくな、行動するお坊さんになりたいと思う。仏様がいるかどうか、答えはまだない。ではある。

華道の授業でお供えの花を生ける練習をする立木一成君(右)と富永余師希君(左)と高野山(左)。

も、今春始まる僧侶になる本格的な修行から逃げ出さない自信は

寺に住み込んで通学する3年生の男子は、ほかに2人。どちらも実家は寺ではない。「仏教書を読むのが好き」という立木一成君(18)は長崎県出身。高野山高校へやってきた当初、ホームシックにかかり「自分は精神的に弱いんだと思つた」。だが、修行を続けるうち、手をあわせると心が満たされるのを感じるようになった。

高野山大学に進学し、お坊さん

になるのが目標だ。埼玉県出身の富永余師希君(18)。「ちょっとやんちゃ」(平幡君)というが、先輩や後輩に囲まれた寺の生活で少し変わった。「前は自分がしたいようにする感じだったけど、今は、一人一人とどう接したらいいか考えるようになった」。

父がけがをしたのに、自分を気遣い、連絡しなくなつたことをきっかけに、高校卒業後は故郷へ戻ると決めた。建築関係の専門学校へ行く。「オヤジに早く楽をさせてあげたい」(二橋麻子)



立木一成君(右)と富永余師希君(左)が、高野山で華道の授業を受ける様子。